

西洋文学への招待

——中世の幻想と笑い——

清水孝純 著

九州大学出版会

(著者紹介)

しみず たかよし
清水 孝純

1930年、東京に生まれる。東京大学大学院比較文学科博士課程中退。日大講師を経て1969年、九州大学教養部助教授、現在は教授。西洋文学を担当。1976年から1978年にかけてヨーロッパ滞在。小林秀雄研究からドストエフスキー研究に入り、1982年『ドストエフスキー・ノート——『罪と罰』の世界——』（九州大学出版会）により第1回池田健太郎賞受賞。著書に以上のほか、『小林秀雄とフランス象徴主義』（審美社）、編著に『鑑賞日本現代文学16小林秀雄』（角川書店）など、その他共著、論文多数。

西洋文学への招待
——中世の幻想と笑い——

検印廃止

1982年7月15日発行

定価2,700円

著 者 清 水 孝 純

*

発行者 水 波 朗

発行所 (財)九州大学出版会

〒812 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学構内

電話 092-641-1101 内線6439

振替 福岡3677

印刷／正光印刷 製本／篠原製本

©1982 Printed in Japan.

1098-865049-1523

はしがき

—遊びについて—

今は古典ブームだという。NHKの教養番組では日本の古典に取材した「中世の笑い」が放映され、昼のプレゼントなる番組では、万葉集や古今集に見られる言葉の遊びが気楽な茶の間に飛び込んでくる。古典ブームといっても、例えば戦時中そうであったような古典ブームとは恐らく大きく異なったものがあるだろう。現代の古典ブームには、分別臭い、しゃちこばった解釈や、内容の思想的把握といったもっともらしさより、より古典を文芸として愉しもうという態度が底にはっきり流れているのではないかと思う。いうまでもなく、これは極めて健全な態度なのである。

しかしなぜ古典ブームなのだろう。そしてなぜそれが愉快なのであろう。という点についていえば、現代人が現代的な遊びに飽き、深く伝統に根ざした真実の遊びというものに本能的に魅きつけられてきた、というしかない。

現代は遊びの充満した時代である。特に日本においてそれがはなはだしいように思う。日本はすべてを相対化し、モード化乃至ムード化してしまう。西欧では、鋭い牙を持った反抗^{レヴォルト}の行為も、この地に来ると奇妙に柔らげられ、なんとなくアクセサリー的に馴致され、その内容によって激しく対決を迫る衝迫の切実さは、なんとなく薄れて、他のものと並置され、等価に眺められることによって、ひとつの意匠に化せられてしまう。かつて、小林秀雄は、昭和初年の日本の文壇現象をパノラマ的にとらえて、「様々なる意匠」と称したが、「様々なる意匠」に西欧的なも

の一切を転換することこそ、実は日本民族の独自性ではなかったか、という気にさえる。モード化する、あるいはムード化する、そこに働いているのは、遊びの精神といってもいいだろう。文房具屋へ入ったら、何やら中学生らしき服装をした猫の集団の写真があつて、そこに「へなめるなよ」とあつた。現今盛んな中学生の反逆が、そこでは、アクセサリに転換され、微笑ましい御愛嬌になっている。

ロジェ・カイヨワは、遊びを四つに分類し、アゴン（競技）、アレア（賭け）、ミミクリ（模倣）、イリンクス（渦巻・眩暈）とした。現在の日本でも、その各々について、様々な種類の遊びを見出すことが可能であろう。しかしカイヨワも「遊びの墮落」で詳細に考察しているように、これらの遊びは、常にその類落と紙一重のところにあるといえるだろう。カイヨワは遊びを特徴づける規定として、「(1)自由な、(2)隔離された、(3)未確定な、(4)非生産的な、(5)規則のある、(6)虚構の活動」「遊びと人間」より。多田道太郎・塚崎幹夫訳）を挙げており、「遊びが本質的に隔離された活動」であり、したがって、「遊びと日常生活がまじりあうようなことがあれば、遊びの本質そのものが墮落し、破滅するおそれのあることは、たやすく予見できる」という。

現代は遊びの時代ともいえようが、アナキーな遊びは、逆に、人間を拘束し、人間性破壊の兇器に転化しかねない。

このような時、古典文学の世界に、愉楽を求める精神は、本能的に、真の遊びの水脈に溯源しているということがいえるだろう。古典の世界は、近代文学に比べ、より遊びの性格がつよい。近代文学の中心課題はせんじつめれば真実の追求ということになるが、古典文学の世界は、必ずしも真実の追求が中心ではない。話を今、ヨーロッパ文学に限ってみれば、中世からルネサンスにかけて、そこに現われた多様な文芸の形式は、より深く遊びの精神に浸透されているように思われる。それは、いわゆるリアリズムなるものではない。そうした現実志向とは異なつた精神がそこに流れ、形式の多様性を活性づけている。とはいえそれは、単なる遊びではないのであろう。文学

というものが、根本的に人間の悲しみや喜びから発している以上、通常の遊びの、無償性とは異なったものがある。それは、抽象的な文字という記号によって、われわれの感性や思考に浸透し、無意識のうちに、われわれを変えてゆくだろう。ヨーロッパの中世文学といえども、例外ではない。にもかかわらず、そこに底流しているのは、すぐれて遊びの精神といえはしまいか。

ヨーロッパ中世の文学やルネッサンスの文学を、自然科学的な真実点検の眼でみたら、いかにも荒唐無稽であろう。しかし、特に民衆の生活との深い交わりの中に息づいていたそれらの文学では、民衆の観念の世界での解放という願いに沿って、現実解体され、再構成されている。ヨーロッパ文学もまた、神話や伝承の中にその重要な源を発しているが、神話や伝承とは、まさしく、現実が発しながら、現実を超える想像空間として、そこに、人々の喜びや悲しみを封じ込める遊びの場に他ならなかったのではないか。カイヨワいうように、遊びとは、現実と一線を画した虚の空間、それも円環の中での、生命の充足だとすれば、厳しい社会秩序の中においてこそ、逆に、遊びが明確に自己を輪郭づけることが可能になったのかもしれない。強固な外枠によって、がをはめられているからこそ、より純粹に想像力による遊びの空間は、燦然と輝き、活き活きとした想像力が羽ばたき、壮麗な夢想を結晶させることが可能になったのではあるまいか。

現代の遊びは、そうした外からの規制を欠くがゆえに、遊びの輪郭を失う危険にさらされているといえるだろう。遊びを遊びたらしめている規則がたやすく投げ棄てられることによって、遊びは日常性の中に溶解する。遊びが日常化することにより、想像力は限定され、鋭さも新鮮さも輝きも失い、倦怠に満ちた、背の低い、現実^ニに足をとられて、みみっちい、矮小な空想に転落する。そこから由来するのは、廢墟に化した遊びの空間と、情熱の無惨な死灰でしかないだろう。そのような遊びを幾度くり返しても、所詮想像力の輝かしい高い飛翔^ニを与えることは出来まい。このような時、かつての、生き生きとした想像力の森に彷徨することは、この上ない想像力への refreshment^{リフレッシュメント}

ではないだろうか。

しかもそれは究極においては単なる遊びを超えて、人間の生の描く、深い軌跡を辿ることに他ならず、そこでは遊びは同時に、われわれの存在を、そこで自足させる喜びと愉楽に満ちている。かつて、兼好法師は、「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる」と記した。現代の、眼まぐるしい狂騒の間、こうした透明な孤独の一点を有することこそ、真の遊びへの階梯ではないだろうか。



西洋文学への招待

——中世の幻想と笑い——

清水孝純 著

九州大学出版会



目次

はしがき	i
――遊びについて――	
第一章 中世人の心	7
『アベラールとエロイズ――愛と修道の手紙――』	
第二章 西欧的恋愛のロマネスク	41
『トリスタン・イゾー物語』	
第三章 復讐への生成	77
『ニーベルンゲンの歌』	
第四章 中世のトリックスター	119
『狐物語』	
第五章 壮麗なる言語宇宙（その一）	157
△永劫の暗い穴▽『神曲』地獄篇	

第六章	壮麗なる言語宇宙（その二） △贖罪への上昇▽『神曲』浄罪界篇	197
第七章	壮麗なる言語宇宙（その三） △光の薔薇への階段▽『神曲』天堂界篇	223
第八章	機知と偶然の戯れ 『デカメロン』	245
第九章	人間性の黎明 『カンタベリ物語』	289
第十章	中世文学の光源 祝祭的空間の想像力	349
中世文学略年表		363
あとがき		373

第一章 中世人の心

「アベラールとエロイーズ——愛と修道の手紙——」

「アベラールは、当時實際に實現されていた靈的組織と反對することなく、ただこれを超越しこれと獨立せる感情と知覚と思想との新しい王国を、人心がいろいろの仕方で見ずから手に入れる運動の性質を予表していた。

アベラールの経歴に色彩を与え、彼の心を千々に碎いた教会との対立は、ただ宗教制度をその制度のために無知な崇拜をしているその宗派の単に職業的な職務的な金銭のための僧侶と、これらの僧侶の理性、心情、官能がほとんど死んでいる間にも、これらの能力が活発であつた人文学者という本当の光明の子との間の反對にも劣らぬ鋭い対立であつた」。

——ペーター『文芸復興』（田部重治訳）より——

これはヨーロッパ中世の才子佳人の物語である。物語といっても、実在の人物によって交わされた往復書簡にあらわれた、数奇を極めた愛の物語である。才子佳人には何かしら悲哀の影が伴うが、このアベラールとエロイズの愛は、時代に先立って目覚めたものの、運命に抗いつつ、しかし運命を受容してゆき、やがて深い時の忘却の中に没していかなばならなかった悲痛と哀憐に満ちている。そこに落ちているのは、ヨーロッパ中世のなお暗黒を脱しない薄明の影である。にもかかわらず、その愛の劇は、不思議と昨日のように新しい。誰がこれらの愛人たちの裡に、近しい人々の面影を見ないだろうか。キリスト教、それも八百年以上も昔のカトリック教が栄えた時代の、ある特異な知性が一人の女性と共に辿ったその愛の推移はいかにも不可解だが、しかし、そこに既に、ひとつの愛をめぐって、男と女のおのおのが、それぞれの性に捉われつつ示す微妙な魂の軋みさえもが感じられるのであり、それはやがてルネッサンスを生む近代の胎動を伝えているようにも思われる。しかし、その愛は時代によって、無惨にも押しつぶされて行かざるを得なかった。さればこそ、その愛の輝きは増し、ひとときの愛の燃焼は、未曾有の光芒を放って美しいといえるかもしれない。

ピエール・アベラール Pierre Abélard (1079~1142) は、史上に名高いフランスのスコラ哲学・神学の大家であ

る。いわゆる唯名論 (nominalisme 現在の唯物論に当たる) を唱えるロスマン・ド・コンピエーニュ Roscelin de Compiègne と、実念論 (réalisme 現在のむしろ觀念論に当たる) の提唱者ギヨーム・ド・シャンポー Guillaume de Champeaux に学んだが、彼自身は、両者を折衷する概念論 Conceptualisme を説いた。彼は、パリでギヨーム・ド・シャンポーにつき学ぶがやがて師と対立してゆき、彼自身二十二歳の時に、ムラン Melun に、ついでロルベール Corbeil に、最後にパリのサント・ジュヌヴィエーヴ Sainte-Geneviève の丘に学校を開き、その名声は全ヨーロッパに知られ、ヨーロッパ各地から学生が彼の下に集ったという。神学においても、ラオン Laon のアンセルム Anselme につき学び、パリに帰ってからは、名声の絶頂に立った。しかし、ある妙齡の女性との恋愛事件によって、その運命は一変し、アベラールは、サン・ドニ Saint-Denis の大修道院¹に身を置くが、弟子達の要望に応じて再び公衆の前に立ち、その学問を講義する。しかし三位一体をめぐる彼の学説はやがて、ソワソン Soissons の宗教会議 (一一二一) によって異端と宣告され再び、サン・ドニに引き籠るが、その僧院においても他の修道僧らの怒りをかい、プロヴァン Provins の僧院に逃れねばならなかった。その後ノジャン・スュル・セーヌ Nogent-sur-Seine からさして遠からぬ場所に、礼拝堂を建て、三位一体に捧げた。弟子が集まり、それは拡大され、それ自体ひとつの僧院になり、彼はそれをパラクレ Paraclet (慰め主《聖靈》) と呼んだ。しかし彼に対する学生の強大な人気への羨望と、哲學的方法を神学に結びつけ、弁証法 dialectique によって、神秘を追求しようとする急進的な大胆さは、彼への迫害をますます激しいものとした。彼はサン・ジルダス Saint-Gildas の修道院に隱遁するが、迫害は鎮められず、当時大きな勢力を持っていたクレルヴォー (Clairvaux) 修道院の創立者で神秘家の聖ベルナル Saint Bernard (1091~1153) は、再びサンス Sens の宗教会議 (一一四〇) において彼を異端と決定した。尊者、ピエール Pierre le Vénérable が彼を、クリュニー Cluny の大修道院に招致し、ローマ教皇庁に寵愛を取り戻させたが、彼は、その生涯の最後の日々を、サオーヌ Saône の近くのサン・マルセル Saint-

Marcel の小修道院に過ごしにゆき、そこで静寂と孤独の裡に死んだという。

彼は、中世哲学の創立者であり、やがてデカルト Descartes につながってゆく自由思想家の先駆だったといっている。彼は實在論が *ante rem* (事前) を説き、唯名論が *post rem* (事後) の立場をとったのに対して、*in rebus* (事中) を主張した。そこから、概念のみが普遍的實在だとするその学説が生まれてくるのであるが、こうした所に見られるように、事物をその鋭い対立において把握するのがその精神の著しい特質をなしていた。その分析的な態度は、その “*Sic et Non*” (『然りと否』) (一一二) に遺憾なくあらわれている。それは、教父達の言説において、矛盾した部分を集成したものであり、そこに、信仰は信仰として受け入れながら、しかし、「信ずるために知る」というその、批判意識を負った立場が瞥見される。

これは恐らく、時代にさきがけて、理性の力に目覚めた精神であつた。しかし時代は、まさに法王権が自己を確立しようという時期に当たっていた。一〇九五年の末、十字軍の派遣を決めたクレルモンの大公会議が開かれ、聖地奪還が企てられたのと同時代である。それから、およそ一七五年にもわたる十字軍遠征が今や始まった頃であり、法王の権力のいわば上昇期に当たっていた。この宗教的熱狂の時期において、理性主義的な自由検討を主張し、しかも多くの讃美者を集めるアベラールは危険な存在に違いなかったろう。事実アベラールの強大な敵となった聖ベルナルは、第二回十字軍の熱烈な火付け役だった。とはいえ、アベラール自身の裡にも恐らく、その悲劇の種はあつたのだと思う。いわば、これは十二世紀のデカルトといえようが、しかし、美貌と類い稀な弁舌の冴えとに恵まれたこの俊敏なデカルトは十七世紀のデカルトとは異なって、多感な、そこに甘美な欲望の疼きを秘めた、何かしら悪魔の落し子のような横顔を見せているのである。